

日本人の自己紹介における自己開示

岡本 佐智子

1. はじめに

対人コミュニケーションの構築段階は、初対面の人（ストレンジャー）との出会いの段階に始まり、続いて探り合いの段階、そして人間関係強化の段階を踏んでいく。出会いの段階のコミュニケーションで重要な役割を果たしているのが挨拶であり、人に対する型は挨拶から数分間のうちに形成される。いわゆるファースト・ファイブ・ミニッツと言われる第一印象である。そして、その第一印象はその後の人間関係にも大きく影響をおよぼしてしていくと考えられている。ステレオタイプ同様、一度記憶のカテゴリーに収められた人物像は相手との接触度が深まらない限り、なかなか変わらないのが常である。しかも、出会いの段階で否定的な印象が強いと、その人物との接触から遠ざかり、偏ったイメージが固定されてしまう傾向にある。

出会いの初期段階では、人は相手の情報を、挨拶の言語メッセージだけでなく、話し方のリズム、声、顔の表情、視線、姿勢、服装等の非言語メッセージも短時間で統合して評価する。さらに受け手の体調や心理状態といったノイズも含めて、相手を特定のカテゴリーにファイリング化し、その後の対人接触ではそのカテゴリーを用いてコミュニケーションしていく。日本人は出会いの挨拶が重要であることに気づいていながら、その実践に至っていないと指摘されている。

人間関係を築き上げていく初期の接触段階の対人コミュニケーション研究では、例えば Szatrowski (1993, 2004) をはじめとする会話研究や談話分析等で、日本人の会話におけるコンフリクトやコミュニケーション・ギャップの分析が盛んになってきている。しかし、初対面の段階のなかでも、ファーストステージと呼ばれる対人コミュニケーション動機をつくる「挨拶」研究は極めて少ない。

筆者は、異なった文化背景を持つ個人が新しい集団を作りあげていく「ウチ集団」形成の第一段階となる「挨拶」を自己紹介とし、それはどのように個人の情報が開示されているのか、大学生の自己紹介を通して自己開示を考察したい。

自己紹介からの考察は、対人コミュニケーションのように相手の情報に対応した相互作用のコミュニケーション形成ではなく、各々が一集団の成員になるために個人の情報を一方的に開示するコンテキストであることから、一定の開示内容が確認できると考えた。

なお、「自己開示」は、深田 (1998) の定義、「特定の他者に対して、自己に関する本当の情報を言語的に伝達する行動」とする。第一印象は言語よりも非言語の情報に基づく

ことが多いと言われるが、ここでは言語のみを取り上げる。

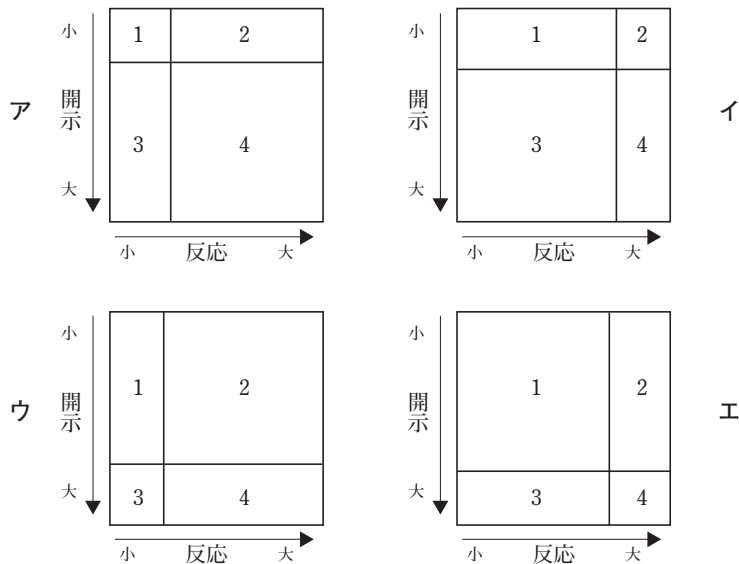
2. 自己開示

初対面の人、特に文化背景の異なった人とのコミュニケーションには、不安がつきまとう。その不安は相手からの自己開示によって解消されたり、危険と判断されたりしてしまう。情報の解釈は一律ではないことから、自分のことをどんな相手にどの段階でどこまで開示するのか、自己開示のリスクは大きい。

西田 (1994) は人間関係における自己開示は、Adler ら (1983) が伝統的な「ジョハリの窓」を用いた説明が自己開示の捉え方の基礎であるとしている。自己の中には、四つの領域があり、それは (1) 自分も知っているし、他人にも知られている「オープンな部分 (開放領域)」、(2) 自分は知らない部分だが、他人には知られている「目隠しされた部分 (盲目的領域)」、(3) 自分は知っているが、他人には知られていない「隠された部分 (隠蔽領域)」、(4) 自分も他人も知らない「未知の部分 (未知領域)」で、対人コミュニケーションではそれら各部分の開示の大きさはコンテキスト、個人によって異なるというものである。

図1 自己開示のタイプ

西田 (1989) pp.30-32 より抜粋



4つの領域で、図1ア～エの各「1」の領域はオープンな部分で、初対面の人に対して話題にする出身地、職業、趣味などがそれにあたる。各「2」は目隠しされた部分で、話すときの癖や、自分では気付かない性格などを指す。「3」の隠された部分には過去の経験、未来の目的、金銭についてや、身体内容等も含まれる。「4」の未知の部分は、自分で自分のことをすべて知るのとは不可能であり、まして他人がその部分を知るよしもない、という部分である。

図1の左上「ア」図のタイプは未知の部分が大き過ぎるため、まず自分について知る必要がある人で、右上「イ」図は隠された部分が大きく、専ら聞き役となるため他人への反応は多いが、自分からの自己開示が少ない人である。左下「ウ」図のタイプは盲目的な部分が大きく、人からの反応をあまり受け入れない、人の意見を信用しない等、自己中心的人物であると言われる。右下「エ」図のようにオープンな部分が大きいタイプは自分に関する情報も人に与えるし、人の意見も聞く人で、心のカーテンを開いている状態といえよう。初期の相互作用の段階で、このオープンさが否定的に働くこともあるが、一般的に、人間関係を形成するのに最も容易なタイプであるとされている。

自己開示の機能には、感情表出、自己明確化、社会的妥当、二者間の関係発展、社会的コントロール、親密度の調整がある。宮原(2000)は「ジョハリの窓は自己を開くこと、自分自身が表裏一体であることをうまく説明してくれる。自分を適度に開いて、相手との共有部分を作ることによって、自己認識を正確なものとする」と述べている。つまり、開示者が被開示者に開示量がどの程度適切であると判断されるかによって、開示者への好意を強めることになるのである。

3. 日本人の自己開示

西田(1989)は、異文化コミュニケーションの観点から自己開示研究の必要性が高いとし、Barnlund(1989)が行った日本人とアメリカ人のストレンジャーへの態度、話しかける動機、初期の相互作用、ストレンジャーの魅力等の比較調査結果に注目している。それは、日本人の方がアメリカ人よりもストレンジャーへの気づき、配慮、話しかけ、対応というすべての点で頻度が低く、特に相互作用をしようと思う点と、実際に相互作用をするという二点において大きな違いがあるということである。

ストレンジャーと話す最も大きな理由は、日本人もアメリカ人も「情報を与える、あるいは助けるため」であったが、日本人の順位は「自分の興味を共有するかもしれない人と知り合うため」「何かについて自分の態度や意見を確かめるため」「礼儀として、社交として」であった。これに対してアメリカ人はトップが「礼儀として、社交として」で、次いで「自分の興味を共有するかもしれない人と知り合うため」「よりおもしろく時間を過ごすため」であった。

こうしたBarnlund(前掲)の調査によれば、ストレンジャーとの会話時間では、日米ともに最も多いのが5分以内(日本人50%、アメリカ人61%)で、それ以上接することに抵抗があると推測されている。さらにストレンジャーとの相互作用の結果に対する満足度では、日本人は相手の職業を聞く傾向が強かったのに対して、アメリカ人はストレンジャーの名前とその人の興味について聞く傾向が顕著であったと報告している。

西田(1998)は日本人学生とアメリカ人学生を対象に、初対面の話題の順番と情報開示量を調査し、初対面の5分以内に話された話題を比較している。

表1：日米大学生の初対面における話題割合¹ 西田（1998）p.45より抜粋作成。

アメリカ	天候（80%）、名前（79%）、まわりの景色（47%）、時刻（45%）、専攻（40%）、履修科目（39%）、行き先（38%）、大学（38%）、共通の友達（36%）、まわりの出来事（34%）、出身地（32%） ※話題数 11
日本	天候（76%）、名前（71%）、大学（61%）、年齢（52%）、出身地（48%）、専攻（48%）、行き先（38%）、住所（38%）、時刻（38%）、家族構成（37%）、まわりの景色（36%）、共通の友達（35%）、通学手段（31%） ※話題数 13

表1のとおり、初対面の最初の5分間における話題では、日米ともに「天候」「名前」「大学」「まわりの景色」「時刻」「専攻」「共通の友達」「出身地」「行き先」の九つの話題が共通である。これは、日本人もアメリカ人も初対面では表面的な話題が大半であることを確認できるが、日本人の話題には、相手の「年齢」「住所」「一人住まいかどうか（家族構成）」といった項目が現れており、アメリカ人の話題には現れていない。

つまり、日本人の話題では、年齢と住所、家族構成、通学手段といった生活形態に関する一連の話題が上位であることから、「相手の背景に関する話題は日本人が必要とする情報である」といったグディカンストと西田（Gudykunst & Nishida, 1984）らが行った前調査結果を強化することになった。

西田（2004）はこれまでの調査から、日本人はアメリカ人に比べて、ストレンジャーへの自己開示が少ないのは、文化差に起因すると再三述べている。

4. ウチ集団における自己開示：自己紹介

初対面の「挨拶」には、対人コミュニケーションであれば、互いに差し障りのないスモールトークで、相手の反応をよみながら共通の話題を選択していく。しかし、新たな集団の成員になるためには、自己紹介がまさしく挨拶となる。自己紹介は一人対大勢の「公的自己」であるため、被開示者は情報内容を同条件で同時に分かち合え、共通点を見出す確率も高いという面がある。しかし、人前で話すことが苦手な者がいるだけでなく、日本人のように集団主義的傾向の文化集団では、一人が開示度の浅い自己紹介をした場合は、次の開示者に「目立つことはリスクだ」「同じようにすることが安全」と判断され、その後の開示者もそれにならって自己開示量が広がらなくなってしまいがちである。

そこで筆者は大勢を前にした口頭開示ではなく、学生に教師への自己紹介文を書いてもらい、自己開示を見ることにした。教師と学生という権力格差意識は避けられないが、一つの授業をウチ集団の形成と捉えた。2005年4月と10月に、筆者の授業を履修した大学1年生の自己紹介文からその開示を眺めてみたい。なお、学生の自己紹介文は授業履修が確定した第2回目の授業終了間際の5分間に行った。

入学してまもない時期の4月の自己紹介には、約7割が氏名のあとに生育地や出身高

校の話題にふれており、趣味に関連付けて高校でのサークル活動といった以前の所属グループについての開示も4割いる。改めて日本人にとっては「出身」が自己開示に大きな比重を占めていることがわかる。

自己紹介の締めくくりには、授業への抱負を話題にした者が5割を超えており、授業参加を通して「みんな」と仲良くなりたい、大勢の友人をつくりたい、が多数であった。また、留学生の抱負には、日本語が上手になりたい、日本語運用の間違いを指摘してほしい、といった学習支援を求める記述も見られた。留学生の中には、出身国・地域名だけでなく、どこでどのぐらい日本語を学習したか、いつ日本へ来たかなどを記す者もあり、ウチ集団の主言語コミュニケーションへの不安が読み取れる。

日本人学生も留学生も自己紹介のパターンは表面的で儀式的なものであり、男女差もなく、西田ら(1998, 2002)の日本人大学生調査と変わりはない。しかし、同年10月に行った学生の自己紹介文では、話題も多様で、より深い開示が見られた。これは、履修学生の9割以上が女子学生であることから、榎本(1997)の大学生調査結果、「男女別に見ると、自己開示総得点は明らかに女子の方が高い」ことが影響していると思われる。

表2：1年生の自己紹介の話題割合²

四月	<p>【日本人】名前(100%)、出身地(70.6%)、授業への抱負(52.7%)、将来の夢・抱負(52.7%)、出身高校(41%)、趣味(41%)、嗜好(41%)、特技(17.6%)、好きな食べ物(11.7%)、近況報告(5.9%)、住所(5.9%)、血液型(5.9%)、学年(5.9%)、年齢(5.9%)</p> <p>【留学生】名前(100%)、授業への抱負(85.3%)、出身地(50%)、近況報告(25%)、所属学科(25%)、年齢(25%)、趣味(25%)、日本語学習歴(16.7%)、来日日(16.7%)</p>
十月	<p>名前(100%)、住所(65.9%)、授業への抱負(56.7%)、性格(41.8%)、授業履修の理由(34.3%)、趣味・嗜好(29.9%)、学年(28.4%)、年齢(28.3%)、家族構成(25.4%)、所属学科(22.4%)、近況報告(20.9%)、占い梓(17.9%)、将来の夢・抱負(14.9%)、ペット(14.9%)、出身高校(13.4%)、好きな食べ物(11.9%)、名前に関する説明(10.4%)、特技(10.4%)、アルバイト(10.4%)</p>

どちらも1年生を対象とした授業で、筆者とは初対面であるが、入学してから半年後の10月の自己開示では、約1割が名前の読み方やニックネーム等に関するエピソードや説明を加えていた。また、以前の所属集団であった高校に関する記述は約13.4%で、4月調査に比べると大きく減少している。これは無意識のうちに自己の帰属意識が高校から大学に移行し、本大学生としてのアイデンティティーが築かれてきたものと推測される。

どこに住んでいるか、どこから通っているか等、住所の話題が6割を超え最も高かったが、そのうち、出生地や育成地、転出・転校経験等、土地の出身に関する自己開示が29.9%、現住所と併せて一人暮らしか、家族と同居であるかといった居住形態も開示している割合が13.4%となっている。家族構成の項目のうち、ペットの話題もあげている者は64.7%に達している。開示割合が高いものはいずれも自分の背景に関する話題である。

年齢を話題にした者のうち、14.9%が誕生日を記している。自分の性格を全体の約4割が話題にしており、そのうち否定的な部分のみを開示している者が71.4%、肯定的な部分

のみの開示者は13.4%に過ぎず、短所と長所を併記した者は15.2%であった。誰にでもありうる否定的な性格をあえて開示する行為は、謙遜の要素を提示し、それが受容されることを前提とした日本的な自己紹介パターンであると考えられる。

近況報告の話題項目では、「高校時代は病気がちであったり、不幸があったりしたが、今は幸せである」「母とよくショッピングに行くようになった」「最近料理が上手になった」「恋人ができた」といった日々の生活に関する肯定的な話題のほか、「最近スポーツをしていないので体が鈍ってきた」「学業とアルバイトの両立が負担になってきた」「肌が荒れてきた」「風邪が治らない」といった悩み(全体の9%)もあった。

このように教師に対する自己開示は、教師と学生という利害関係または恩恵を期待しているためか、口頭の自己紹介では見られない「得意なこと」「特技」も直接的に記されている。その一方で、「高校時代はいじめを受けていた」「病弱である」といったマイナス的に評価される自己開示も、教師は理解者として受けとめてくれると期待しているのであろう。こうした初対面での「甘え」は、ウチ集団の成員意識が生まれているからこそのものであると思われる。

自己紹介の適切さは、聞き手が求めているものを満たしているか、開示量が過剰ではないかということであろう。むろん、場面、相手、目的、環境等のコンテキストによって、自分の情報の開示・非開示の内容も異なる。しかし、学生の自己紹介には、自分の背景に関する事実を話すことが多く、芸術や出来事に感動したなどといった自分の感情や、自分の意見や価値観を現すとといった内面的な話題は皆無であった。

裏返せば、日本人はストレンジャーに個人の感情や価値観は求めているということになる。したがって、相手の住所、年齢、性格、家族、所属、社会的地位等の事実開示さえあれば、被開示者のカテゴリーで人物像が作り上げられ、その物差しを使って相手の行動を予測することで安心するのである。

5. 不確実性の回避と日本人

Gudykunst (1991) は、「ストレンジャーとのコミュニケーションは、通常否定的な期待に基づいている。例えば、異なる民族に属する人と実際にやりとりされる場合、あるいはそれが予定されている場合、不安になるという研究成果がある」とし、集団間のストレンジャーとのやりとりで、人は4つのタイプの否定的結果を恐れると述べている。そのうちの三つは対人コミュニケーションにも共有できると考えられている。

その一つは、自分たちの自己概念に対する否定的結果を恐れることで、不安を感じるのは、無能さや困惑や無力さを感じることに於いてや、自尊心が傷つけられたり、社会的アイデンティティが脅かされたりすること。二つ目は、ストレンジャーとのコミュニケーションで、否定的な行動上の結果が生じることを恐れること。三つ目は、ストレンジャーに否定的に評価されることを恐れることで、こうした不安は無意識のうちにこの不安感を

避けようとする。これらは本学生の4月の自己紹介の話題と開示度に合致し、対人コミュニケーションで「恐れる」ことの多さは、不確実性の回避が強いと考えられる。

「不確実性の回避 (uncertainty avoidance)」とは、相手に関する不確かなもの (不確実性) や、不確実な状況または未知の状況に対して脅威や不安を感じる程度を指し、それは国民文化によって強弱があるとされている。Hofstede (1991, 1995) の調査結果³では、日本は不確実性の回避が強く、集団主義的な傾向も強い国に分類されている。53カ国・地域のIBM社員調査から、不確実性の回避の高さを指標で見ると、上位からギリシア (指標112)、ポルトガル (104)、グアテマラ (101)、ウルグアイ (100)、ベルギー (94)、エルサルバドル (94) で、日本はスコア92で第8位に位置している。

その反対に、不確実性回避の最も小さい国はシンガポール (8) で、以下ジャマイカ (13)、デンマーク (23)、スウェーデン (29)、アイルランド (35)、イギリス (35)、マレーシア (36)、インド (40)、フィリピン (44)、アメリカ (46)、カナダ (48)、インドネシア (48) と続く。このほか、Gudykunst (1998) も「不安感の回避 (uncertainty reduction)」が高い文化国に、エジプト、アルゼンチン、チリ、フランス、ギリシャ、日本、メキシコをあげている。こうした不確実性回避度の格差が大きい人々とのコミュニケーションには、自己開示のずれも大きく、往々にしてコミュニケーションギャップが起こりやすくなる。

Hofstede (前掲) は、不確実性の回避の弱い社会と強い社会の基本的な違いとして、不確実性の回避が強い社会は、「違うということは、危険なことである」「危険についてよくわかっている場合は受け入れるが、あいまいな状況であったり、危険についてよくわからない場合には恐れる」「怒りや感情を発散してもよい時間や場所が決まっている」「精密さと規則正しさは自然に身につく」等の傾向があると特徴づけている。

またこの不確実であるという感情は、個人的なものばかりでなく、社会の他の人々とある程度共有されている可能性があるとしている。「価値観と同様に、不確実であるという感情も獲得され学習されているものである。そのような感情およびそれに対応する方法は、社会の文化遺産の一部であって、家族、学校、国家といった基本的な制度を通して受け継がれ強化されている。不確実な感情は、それぞれの社会のメンバーが共通して抱いている価値観に反映されており、その根源は非合理的なものである。それぞれの社会で集合的に保持されている価値観に応じて、なんらかの集合的な行動パターンが生まれることになるが、そのような行動パターンは、他の社会のメンバーには奇異で理解しがたいものに思えるかもしれない」と述べている。

前述のHofstedeが調査した不確実性の回避は、個人主義と集団主義、権力格差、男らしさ・女らしさ文化の相関関係で分析されており、日本人の文化傾向は、集団主義的傾向、男らしさ傾向に加えて、異なったものやことへの回避度が高いことを指摘している。言うまでもなく、この調査結果から日本人を一般化することはできない。日本人にも不確実性の回避が弱い人なら、異なるものに好奇心をそそるであろうし、回避が強い人は「異なる

ものは危険」と捉えるであろう。

しかし、日本人の不確実性の回避が強いことは多々観察される。例えば、外国人から道を聞かれて、自分に危害を加える可能性が低いと判断しながらも、その場を逃れようとするのであろう。たとえ質問が流暢な日本語であったとしても、外見が明らかに非日本人であれば「違うことへの不安・危険」が、無意識に働き自己防御として回避するのである。西田ら(2002)は明らかに外集団のまま終わってしまう出会いであれば、出会いそのものを避けたいと考える日本人もいると報告している。

6. 日本人が外国人に求める自己開示：不確実性の減少

ストレンジャーとの初期段階における話題は、その文化内で一般的な身上調査的および表面的な情報をまず相手に開示するスクリプトがある。しかし、外国語教育に共通して見られる学習内容は文化を無視した普遍的なスクリプトで組み立てられている。例えば、日本語教育や英語教育の教科書⁴から、初級レベルの学習項目を追っていくと、自分のことが説明できるという発信型の学習目標でありながら、相手に直接的で唐突な自己開示を求めるインタビュー練習をさせている。こうした外国語教育は、教師にコントロールされた教室の中の口頭練習では問題がないが、実際の対人コミュニケーションでは明らかにルール違反となる。事実、その学習者たちは「ガイジン」として、初対面の日本人から受ける「身元確認」のような質問に戸惑いを覚えている。それは不確実性回避の弱い文化と強い文化のすれ違いである。

外国人が初対面の日本人に尋ねられて不快になる質問項目⁵をあげると、

(1) 詳細な現住所を聞く

質問例：何駅が近いか。駅のどのあたりか。近くにどんな建物があるか。

(2) 居住形態を聞く

例：誰と住んでいるか。家の構造や間取り。家賃。

(3) 在籍学校または勤務先等の名称、待遇について聞く

例：なぜその学校／会社に入ったのか。給料は良いか。肩書は何か。

(4) 在籍学校または勤務先の住所を聞く

例：通学／通勤交通手段とその経路。通勤時間。

(5) 専門または仕事内容の詳細について聞く

(6) 職歴や副業を聞く

例：来日前にどんな仕事をしていたか。今アルバイトをしているか。時給はいくらか。何時から何時まで働いているか。

(7) 家族について聞く

例：家族構成。家族の年齢、職業。誰が料理を作り、どんな食生活か。

(8) 既婚・未婚について聞く。

例：独身か。恋人はいるか。(恋人がいなければ)日本人の男／女性は好きか。
子どもはいるか。奥さんは何歳か。結婚したのはいつか。2人はどこで知り合ったのかといった馴れ初めを聞く。

(9)身体・持ち物について聞く。

例：(体格がよい人に)身長や体重を聞く。装飾品の購買先やその評価。(高価そうな装飾品を指して)それはだれからのプレゼントかと聞く。

(10)帰国予定日を聞く。

例：いつ国へ帰るのか。いつまで日本にいるのか。

といった質問が並ぶ。(1)から(7)までの話題は本来なら問題ないはずであるが、日本人は深く入りこんだ情報を求める。(8)も日本人にとっては表面的な話題として考えているが、「隠された部分」の開示要求と受け止められる傾向にある。(9)のような話題は日本人どうしであってもある程度の親しい関係でなければ尋ねないのであるが、ソト集団の人に向かっては情報収集が優先される。(10)は、短期滞在者であれば「お客様」であるが、長期滞在者であればウチ集団へ迎え入れるかどうかの要素となる。

不確実性の回避が強い日本人にとっては、ストレンジャーからの情報を集めることで不確実な部分が減少し、不安も減少するのである。しかし、こうした相互作用のない情報収集方法は、特に個人主義的傾向の強い文化をもつ人々には、明らかなプライバシーの侵害と受けとめられがちである。

日本人が初対面でなぜこうした質問をするのかは、積極的なコミュニケーション活動をするための初期段階の手続きとして、不確実性の減少行為をしていることは明らかである。不確実性を減少させていくことは好意を増加させているのであるが、日本人は会話を膨らませるというより、相手との共通性を発見するための確認をするために踏みこんだ情報を一方的に求めてしまう傾向がある。しかし、外国人にとっては相互に自己開示の交換や調整もなく、唐突に「プライバシー公開」を迫られ、「尋問」を受けているような気分になるのである。こうしたことが繰り返されていくうちに、自己紹介の段階で隠しておきたい部分も仕方なく開示する「同化派」と、日本人の踏みこんだ質問をジョーク等がかわず「ウンザリ派」が生まれるのであるが、どちらにしても、親しさのコミュニケーションプロセスを飛び越えた一方的な自己開示要求は違和感があるようである。

7. おわりに

私たちの日常行動は無意識であり、同じような行動を繰り返せば繰り返すほど、私たちは各自の学習経験スクリプトによってそれを進めていく。日本の義務教育ではスピーチコミュニケーションやコミュニケーション授業など、ことばで自分を伝える訓練を行っていないため、自己紹介の重要性にも目を向けられていない。何をどう開示していくのかの手

立ては個人に委ねられている。

日本文化の特徴である高コンテクスト社会では、自己を語りながらコミュニケーションすることよりも、相手や周囲の人々に察してもらおうとする甘えがある。そのため、自己紹介というスキルも曖昧なまま放置し、就職試験等の実利を伴ったソト集団へのエントリーに直面して、初めて自分に好意を向けてもらうための自己表現ができないことに気づくのである。

自己紹介における自己開示も、場や相手を見極めるためには、モニター能力が必要となってくる。そして相手が開示したら自分も開示すること、秘密を開示されたら他言しないこと等、当たり前前のルールがあることも再認識しなければならない。

何よりも自己紹介をする側が、できるだけオープンで適切な自己開示をするためには、自己をどれだけ知っているか、アイデンティティーを認識しているかが鍵となる。自己概念の確立は簡単ではないが、筆者はまず、自分をことばで伝えることの意識化を図ることや、様々なコンテクストに適応した自己紹介を考える機会を提供し、訓練していくことの必要性を強く感じている。

日本人は、相手の年齢や住所、出身地、属する集団、社会的立場といった、相手の背景に関する情報を確実に得ることで自らの不安解消に努めようとするのであるが、自己開示の求め方も再考する必要がある。

注

1. 西田の調査は1990年9月と10月に、アメリカ人学生152名、日本人学生241名で、それぞれアメリカ西部の州立大学、日本は関東の私立大学で調査紙を使って行われた。
2. 各話題割合は、4月の自己紹介文は2005年4月7日に実施し、本学外国語学部日本語学科選択科目「日本語教育概説」出席学生35名のうち初対面ではない学生3名を除いた。留学生数は12名で全員中国人である。10月の自己紹介文は2005年10月20日に実施し、本学人間科学部健康栄養学科教養選択科目「異文化間コミュニケーション論」出席者71名のうち、筆者と面識のある4名を割愛した。
3. Hofstedeが1970年～80年代に、世界のIBM社員約10万人を対象とした調査については、その調査方法等にさまざまな批判があるが、数少ない実証的研究結果として、一つの目安として参考にしたい。
4. 例えば、自分の状況や意見を述べる練習を多く扱っている日本語教科書『Basic Japanese for Students はかせ 留学生の日本語初級45時間』では、第1課の「自己紹介」で、名前、国籍、出身地、職業、所属学科、専門、趣味が言えるようにし、7課では「いつ、日本へきましたか」「いつ、国へ帰りますか」が口頭練習項目に入っている。10課、19課では来日目的、詳細な家族紹介へと続く。会話教材の『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ50』でも、自己紹介

で最小限に伝えるべき項目として、名前、出身地、母語、趣味、どこに住んでいるか、等が設定され、学習が進むにつれて「なりきり自己紹介」練習で、特定の人物になりきるための事前練習としてインタビューをさせている。このほか、地域社会で生活する人々を対象にしたテキスト『にほんご宝船』にも、家族紹介として、出身、年齢、誕生日、趣味、性格、職業がタスク練習に盛り込まれている。

国外で作成された初級日本語教科書では、アメリカをはじめ英語圏で使用されている『Yookoso!』でも、出身、年齢、住所、年齢、誕生日、電話番号を尋ねるアクティビティがある。

英語教育においても、国内向けの英語学習用テキストはいうに及ばず、国際的なテキスト『Real time English』においても初級レベルの早い段階で、学習者に年齢、出身地、職業、趣味、家族を尋ねさせる会話練習が設定されている。

いずれも、中級レベル以上の教科書や副教材では、自分をいかに印象付けるかといった自己紹介課題を取り入れるようになっていく。日本語教育では『中級から上級への日本語』第1課に「ひとと味違う自己紹介」として、日本人に対して効果的な自己紹介のあり方を考えさせていく教材もある。

5. 筆者がこれまでの17年間に担当したビジネススピール対象者の日本語授業をはじめ、ニュージーランド人大学生、アメリカ人大学生、ロシア人大学生らが、クラスに持ち込んで来た「不満」の多い質問を順不同であげた。

参考・引用文献

- 櫻本博明 (1997) 『自己開示の心理学的研究』 北大路書房
- 鎌田修他 (1998) 『中級から上級への日本語 Authentic Japanese Progressing from Intermediate to Advanced.』 Japan Times
- 東京工業大学留学生センター日本語教育研究会他 (2002) 『Basic Japanese for Students はかせ 留学生の日本語初級 45 時間』 スリーエーネットワーク
- 中村律子他 (2005) 『人と人をつなぐ日本語クラスアクティビティ 50』 アスク
- 西田司 (1989) 「人間関係における自己開示」「コミュニケーションの不安」『国際人間関係論』 聖文社 pp.27-57
- (1994) 『異文化と人間行動の分析』 多賀出版
- (1998) 『異文化の人間関係』 多賀出版
- (2004) 『不確実性の論理 対人コミュニケーション学の視点』 創元社
- 西田司・W. B. グディカンスト (2002) 『異文化間コミュニケーション入門—日米間の相互理解のために』 丸善
- 星野命編 (1998) 『対人関係の心理学』 日本評論社
- 春原憲一郎他 (2004) 『にほんご宝船 いっしょに作る活動集』 アスク

- 深田博巳 (1998) 『インターパーソナル・コミュニケーション—対人コミュニケーションの心理学』
北大路書房
- ポール・ケリー他 (1990) 『ケリーさんのすれちがい100 日米ことば摩擦』三省堂
- ポリー・ザトラウスキー (1993) 『日本語の談話の構造分析—勧誘のストラテジーの考察』くろしお
出版
- 宮原哲 (2000) 『コミュニケーション最前線』松柏社
- (2002) 「対人コミュニケーション」『異文化コミュニケーション・ハンドブック』有斐閣
- Adler, R. B., Rosenfeld, L. B., & Towne, N. (1983) *Interplay : The Process of Interpersonal
Communication*. CBS Publishing.
- Barnlund, D. C. (1989) *Communicative Styles of Japanese and Americans : Images and Realities*.
Wadsworth.
- Bergaer, C.R., & Bradac, J.(1982) *Language and Social Knowledge*. Edward Arnold.
- Bray, B. (2002) *Time to Communicate コミュニケーション初級英語講座*. 南雲堂
- Gudykunst, W. B. (1991) *Bridging Difference Effective Intergroup Communication*. SAGE. (翻訳 ICC
研究会訳 (1993) 『異文化に橋を架ける 効果的なコミュニケーション』聖文社)
- Gudykunst, W. B. (1998) *Bridging Difference Effective Intergroup Communication*. (3rd. ed.) SAGE. p.61.
- Gudykunst, W. B. & Nishida, T. (1984) *Individual and Cultural Influence on Uncertainty Reduction*.
Communication Monographs, 51, pp.23-36.
- Gudykunst, W. B. & Nishida, T. (1994) *Bridging Japanese/ North American Difference*. SAGE. pp.61-66.
- Hofstede, G. (1991) *Cultural and Organizations : Software of the mind*. McGraw-Hill. (翻訳 岩井紀
子他訳 (1995) 『多文化世界 違いを学び共存への道を探る』有斐閣 pp.115-147.)
- Langer, E. (1989) *Mindfulness*. Addison-Wesley.
- Rost, R. (1994) *Real Times English : Student Book*. Longman.
- Szatrowski, P. (2004) *Hidden and Open Conflict in Japanese Conversational Interaction*. くろしお出版
- Tohsaku, Y. (1999) *Yokoso! : An Introduction to Contemporary Japanese*. (2 nd. ed.) McGraw-Hill.